（実践研究）「国語科教員を目指す学生への指導について」
－５年間の理論と実践－

松村美奈（非常勤講師）・豊永利英（前非常勤講師）

愛知大学教職課程（国語科）では、平成19年より平成23年まで、豊永利英氏・松村美奈の二人体制で授業構成法（国語）の演習及び講義を担当してきた。平成24年度からは豊永氏退職に伴い、山口廣明氏が引き続き演習を担当されている。（現在の科目名はそれぞれ「国語科指導法」、「国語科教育法」となっている。）

平成20年３月には中学、そして平成21年３月には高等学校国語科の新学習指導要領が公示され、教育の方向性も目まぐるしく変化しつつある。しかし学生たちは、熱意を持って教員を目指し、日々努力を続けている。そしていざ教員に採用され、現場へ飛び込んでいった学生たちも、非常にたくましく生き生きと学校で働いていることを知る度に、学生たちの秘めたる可能性を実感している。

そこで、本稿ではこの５年間の総括として、国語教員を目指す学生たちに指導してきた実践の概要を記し、これからの国語科教育指導の布石としたい。

構成の都合上、前半部に【１】、後半部に【２】の番号を付してある。前半【１】では、松村美奈の担当した「授業構成法（国語）」の講義について概説する。後半【２】では、豊永利英氏の担当した「授業構成法演習（国語）」について述べる。【１】・【２】の題名・文章・注についての記述は各自筆者が責任もって担当し、それぞれ独立したものとなっている。

（松村記す）

【１】国語科教員を目指す学生の現状とその指導　～講義の概要～

松村　美奈

１　はじめに

平成19年の後期（９月）から授業構成法の講義を担当し、本年で６年目に入る。毎年様々な学生が履修し、大変真面目に受講する。授業を受け持つ講師側としては非常に有り難い。しかし、学校現場には現実的に難しい問題もあり、それが日常であることも知った上で教員を目指すべきだと考えているので、筆者の担当する授業では、国語教育の理論的な面に重点を置きつつ、現実的な面も実感させながら授業を進めてきた。授業の作り方、指導の方法、学習指導案の書き方、教員としての心得など実践的で具体的な内容については全て授業構成法演習（豊永利英氏担当）の演習授業で詳細な指導をお願いし、筆者の講義では、国語という教科の特質を理解させながら、教育実習及び教員として教壇に立つ際、「適切な授業を構築できる力をつける」という目的で講義を行ってきた。本稿では、その概要を記し、学生の現状を報告する。

２　講義の実際

「授業構成法」（講義）の授業は、次のような三本の柱を立てて進めた。

(1) 学習指導要領（高等学校及び中学校国語）について理解する。

(2) 国語の教科書（教材）の扱い方を考える。

(3) 自分で授業を構想する。

この講義は、授業をつくるとは一体どういうことなのかを、理論的に理解させることがねらいであった。学生たちは、大学の教職課程を履修して初めて「学習指導要領」の存在を知ることになる。主に高等学校の学習指導要領を中心に解説するが、中には中学校教員志望の学生も少なからずいるため、中学校指導要領も多少説明を加えている。特に平成21年３月に公示された新学習指導要領（高等学校）の改善ポイント３領域１事項（Ａ話すこと・聞くこと。Ｂ書くこと。Ｃ読むこと。伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）について取り上げて概説している。

橋本武は次のように記す。　（傍線は筆者による）

> 勉強は大学入試のためだけにあるのではありません。長い人生を生きていくための基礎力をつけるためにあるのです。とくに国語はそうなのです。<u>国語はすべての教科の基本であり、学ぶ力の背骨</u>といっていいでしょう。

ここに述べられるように、国語という科目は「学ぶ力の背骨」である。国語教員を目指す学生たちは、全ての教科に通じる「背骨」となるものを教えなくてはならない。それが３領域（話すこと・聞くこと。書くこと。読むこと。）に当てはまるといってよい。

学生たちは、小学校から高等学校まで使用してきた教科書が学習指導要領に従って作られていること、教員は学習指導要領に沿って授業を構築しなくてはならないということをほとんど知らない。各自理想を持って教員を目指し、理想的な授業を思い描いて教職課程を履修する。しかし、教員というものは、好き勝手に教えるのではない。まず指導の基盤として学習指導要領に掲げられた内容を踏まえることが前提であることを認識させ、学習指導要領は、指導案作成の際に大きく関わることも最初に指摘している。授業をつくるには必ず「どういう力をつけたいのか」という目標を設定しなくてはならず、その目標を具体化するためにも、学習指導要領の理解は欠かせないものとなる。

以前履修者（2010年度）に「国語教員として何を教えたいですか」というアンケートを出したところ、次のような意見がでた。

「コミュニケーション能力を向上させたい」「自分の意見を考え、まとめて発言する力をつけたい」「言語教育に力を入れたい」「言葉によって相手に何が伝えられるのかを教えたい」「日本語を正しく使えるように指導したい」等という意見が非常に多く、「言語能力」「コミュニケーション能力」を養いたいと考えている学生が大半であった。その一方で、「読むことの面白さ・楽しさを伝えたい」「論理的に思考することを学ばせたい」というような「読むこと」に関する意見がごく少数で、「聞くこと」「書くこと」についての意見はほ

とんど出ず、古文・漢文に言及している学生は皆無に近い。これは2010年度に限らず、アンケートを行ったときはほぼ同じ結果となる。

おそらくここ２～３年で入学してきた学生たちは、小学校・中学校の時期に人前で発表するなど、グループ学習を経てきており、自らの楽しかった体験をもとに、「教えたいこと」として思い描いているようであった。しかし、一方で古文や漢文は「教えたいこと」ではないのか？と問うと、皆が考え込んでしまうという状況であった。

また、2011年度の履修学生に、「最も心に残った国語科教材は何か」というアンケートを行ったことがある。その結果、あがった教材は夏目漱石『こころ』･芥川龍之介『羅生門』･中島敦『山月記』が半数以上を占め、偏りが激しい。その理由の多くは、授業の際、グループで話し合ったり、クラスのみんなで意見を述べ合ったりして記憶に残ったから～というものであった。古文・漢文教材の例は『源氏物語』[1]例のみであり、心に残るほどではないとのことであった。

初めにこうしたアンケートを毎年行うと、教材に対する認識が希薄で、好きな教材・嫌いな教材というような感情で割り振っているようなところが見受けられる。それは、彼らが「生徒」の観点で、授業や教材を眺めた結果なのである。

ある程度学習指導要領の概説がすむと、実際の教科書（『国語総合』）を使い、単元・教材設定の比較を行うことにしている。特に教科書によって、本文が異なる例をあげて見せたりする。例えば芥川龍之介『羅生門』であったら、以下のような事例である。（傍線は筆者による。振り仮名は省いた）

（本文例）

ただ、ところどころ丹塗りの剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。（東京書籍）

ただ、ところどころ丹塗りのはげた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹止まっている。（三省堂）

ただ、所々丹塗りのはげた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。（筑摩書房）

（例）学習の手引き

○下人の行動と心理の移り変わりを整理してみよう（東京書籍他全て）

○この作品に繰り返し出てくる「にきび」の描写について考えてみよう。（三省堂のみ）

○自分が「下人」の立場に立ったならば、どのように考え、行動するだろうか。自由に話し合ってみよう。（筑摩書房のみ）

こうして実際に比較すると、同じ教材を扱っていても、教科書によって問題の切り口が異なり、本文の句読点や漢字やかなの使用方法も異なることを見せると、自分たちが使用してきた教科書も、「なんとなく読んでいたもの」から「教材」という観点で眺めるようになる。それだけにとどまらず、自らの立ち位置を自分で考え、授業をつくらなくてはならないことに気づくのである。

愛知県総合教育センター『授業の手引き（高等学校国語）』[2]には次のように記される。

「学習の手引き」は、そこに集められた問い掛けを順に考えてゆくと、教材に盛

られた書き手の主題に、より的確にたどり着けるようにできているはずである。このような手引きを単に読解上の質問例としてとらえるのではなく、教材化のよき見本の一つとして把握する姿勢が重要である。

このように、教科書に掲載される作品を細かく読み込んで自ら教材化し、自らの授業を構想していかなくてはならないのである。生徒の観点から教師の観点へと見方を変えることで、学生たちは一段階教員に近づいていくわけである。

３　授業を構成するということ

授業を考えさせる時、「授業を作る力＝企画する力である」と説明することにしている。企画というと少々語弊があるかもしれないが、５０分間という時間をどう使って、何を教えるのか、その企画を練るつもりで授業を構成して欲しい、と学生たちに伝える。つまり、一つの教材を取り上げ、全てを教えきる全体のイメージを作り上げ、何時間に割り振って授業を進めるかという一種の企画を立てるように促し、「学習指導案」（略案）までを考えてもらうのである。その際、どういった形の授業が望ましいのかも含め、全て学生に任せる。学生達はよく、「上手くいく授業のやり方はないですか？」「失敗しない方法を教えて下さい。」と言う。そんな学生には「上手くいく授業とは何か？」「指導方法が同じでも授業を受ける生徒が違ったらどうか・・？」などと聞き返すことにしている。このような「守り」に入る学生がいるため、あえて真っ新な状態で考えてもらうように促しているのである。そうなると学生達は必死で考え、自分なりにまとめ上げてくる。

町田守弘氏は国語科授業における問題点について次のように述べる。[3]

> ・・・読んで、説明して、分からせて、暗記させるという伝統的な教師主導型・知識注入型の授業と、オンデマンド授業のような新しい授業形態とが混在する現在、学習者の実態を的確に把握したうえで、どのような形態の授業を展開するのかを模索しなければならない。科学的な方法に基づく有効な授業研究が求められることになる。特に、「読むこと」の学習指導が一つの岐路に立たされている。授業において教師の発問に対する学習者の反応はきわめて鈍い。特に学年が進むにつれて、彼らの反応は皆無となる。たとえば小説の主題を考えるという類いの発問には、彼らはほとんど反応しない。指名されてもただ黙して下を向いたままである。何かを答えたとしても、発表する声が小さくて、離れた席のクラスメートまでは届かない。教室全体が「待ち」の姿勢になっている。（中略）教科書の教材を読んで、説明して、分からせて、暗記させるという授業の形態は、暗記させた結果を定期試験で問うという場所へと帰結する。

町田氏の指摘は具体的で正しい。学生たちもこの問題点を認識しているようで、授業をつくる際、教師から生徒への一方通行にならないように一生懸命考えている様子がよく分

かり、しっかり工夫を凝らして構想を練るので、非常にこちらも勉強になる。

大まかな単元案を作り、出来る者には５０分間の学習指導案も作成させ、簡単な模擬授業もしくは発表の形で他の学生に聞いて（あるいは見て）もらう。その後、必ずその発表内容の良い点・改良すべき点を全員で評価用紙に記入し、その評価は氏名を消して発表者に渡し、今後の授業案に役立てるという流れをつくっている。２年生でも非常に上手く構成する者もいれば、３年生なのに授業が成立しないものを作るものもいて、互いに良い刺激となっている。

授業をつくってもらう際、特に注意していることは、想定問答を各自つくるということである。斎藤孝氏は次のように述べている。[4]

> ‥授業の構造は主に質問する、つまり「発問」から成り立っています。教材があって、生徒がいて、先生が発問するのが授業です。授業での発問は、ただの質問ではなくて、読み取りを要求するような問いの出し方をします。（中略）授業ではこの発問づくりが重要なポイントになります。だいたい三つくらい良い発問が思いつけば、授業はうまくいきます。ところがクイズ方式のようにくだらない質問しか思いつかなければ、一問一答式で終わってしまって、あまり考えが深まりません。つまり、考えを深めるための問いが必要だということになります。

斉藤氏が指摘するように、発問は授業の核となるので、学生たちにはとにかく発問事項をたくさん考え、授業の流れに沿って必要だと思う発問を絞り込むように指示だけして全て自由に考えさせている。

学生の発問は非常に面白い。教員側（筆者）は前もって教えずひたすら学生任せでレジュメを作成してもらい発表する。しかし、授業展開に沿った非常にうまい発問を考えてくるものもいれば、茫洋とした発問をし、部屋中を「しーん」とさせてしまう学生もいる。また、良い発問をしても、思い通りの答えが導き出されないことも多々ある。

力の差が出るのは、そんな時の対応である。臨機応変に上手にかわせるのか、口ごもってしゃがみ込むのか・・・。こうした訓練を経ると、学生たちは授業をつくることに無自覚だったのが、意識に変化が生じてくるのがよく分かる。

こうした模擬授業（発表）を経て初めて教材研究の重要性が認識できるようである。本当は教材研究あっての授業構想であるはずなのに、学生たちはとりあえず文章を大雑把に読み、思いつきで発問を考えて授業構想に臨む者は大概打ちのめされている。授業構成法において、教材研究も学生への大切な指導要素ではあるが、何をどう研究する（調べる）かは、自覚してやっと始められるものである。自らの知識不足、指導不足を再認識して初めて研究に目覚めるのが学生の現状である。要は、本人が実際教壇に立ち、生徒と対峙した時に、確実に授業を展開できればよい、そのように考えてこちらも講義を進めてきた。

大学の教職課程の授業でできることは限られる。特に講義では理論と実践を交えて体感してもらうことが一番効果的ではないかと考

えている。

本来、「何を教えるか」という指導目標に沿って教科書を選び、単元教材を選ぶ。しかし、実際の教育実習へ行かなくてはならない学生たちは、まず教材を与えられてしまう。その教材で何が教えられるのかを、その場で考えなくてはならない。大変な作業であるが、やはり普段の講義において、多くの教材にあたり、様々な角度から教材研究は念を押して指導したいところである。

４　評価するということ～添削の事例～

教科指導には必ず評価がつきものである。３領域「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」についての評価方法は様々だが、本講義では毎年「書くこと」の評価方法の実践として、「互いに文章を書き、添削し合う」ということを行っている。2011年度は、筆者が受け持っていた過去の高校１年生の答案（文章）を少々加工して与え、教員の立場で添削させるという実践を行った。学生たちには細かな添削方法は説明せず、自由に添削させている。後に【添削実践資料の一例】①～⑥として学生の添削例と、添削した時の感想を付したので参照されたい。添削指導経験などない学生たちは、この実践には面食らっていた。大学生同士の文章であると、ある程度のレベルを保った答案なのだが、実際の高校生の文章答案は文章の形をなしていないものが多く、学生たちはどのように評価をつけるか悩んでいた。上手にコメントをつける学生もいれば、何をどう書いてよいのか分からず、ほとんど朱を入れられなかった学生もいる。その後、いくらかの添削例を印刷し、配布すると、学生同士でそのコメントの入れ方等の違いに驚嘆の声をあげていた。特に塾や家庭教師経験者は、ポイントの押さえ方や説明の仕方は抜群にうまいし、初めての学生も、「生徒にどう説明したら伝わるのか」を必死に考えてコメントをつけている様子がうかがわれ、頼もしく感じられた。

このような実践は、少々無謀にも思われるが、国語教員にとっては、文章添削は日常茶飯事の仕事といってよい。常に生徒たちの文章に触れ、コメントを付したり、小論文を細かく添削しなければならない。それは、新人教員であろうとなかろうと、教壇に立った瞬間から評価を強いられるといっても過言ではない。大学２～３年生のうちから、このような経験をさせることは、これからも大いに意義があるのではないかと考えている。

５　まとめにかえて～これからの課題～

本稿では、これまでの５年間の総括として講義とその実践の一部を記してきた。大まかな概要しか記すことができなかったが、まだまだ講義内容に関して、改善の余地があると思われるので、是非ご教示願いたい。

これからの課題としては、古文・漢文の授業方法の指導をもう少し深化させる必要があると考えている。【Ⅱ】の豊永氏の論考の中にも指摘があるが、高等学校時代に漢文をきちんと学習しないまま大学へ入学する者や、古文の基礎が定着していない者が教員を目指すこともあるからである。また、古文・漢文の魅力、おもしろさを伝えきれない学生も目

立つので、こうした点を再考していかなくてはならない。

魅力的な授業ができれば、生徒との信頼関係も構築できる。それには教材研究が欠かせない。そのためには、「人間力」を備えるべく、学生たちには失敗を恐れず、様々なことを吸収し、何度もチャレンジする強い精神力を養ってもらいたい。それが魅力的な教師への第一歩ではないだろうか。

【2】「授業構成法演習（国語）」の授業とその周辺

～老新人非常勤講師の５年間～

豊永　利英

1　はじめに

平成19年春、65歳で初めて大学生を教えることになった。担当は「授業構成法演習（国語）Ⅰ・Ⅱ」である。

この年から春学期に〈Ⅱ〉を、秋学期に〈Ⅰ〉を実施する。春に〈Ⅰ〉、秋に〈Ⅱ〉と行うのが順序だが、入れ替えの理由は、春に〈Ⅰ〉を実施するのは、履修する１年生がまだ大学生活に慣れておらず戸惑いもあるだろう、という大学の配慮からである。この入れ替えは、春に〈Ⅱ〉を受講することになった４年生にも好都合となった。学習の流れに乗って「教育実習」に入り、夏に実施される「教員採用試験」への意識を維持できることになったからである。

授業のねらいは、自分が経験した小学校から公立高校、さらに私立女子高校までの43年間の教師生活で得た技術や知恵を、演習を通して伝達することに置いた。教師は、「具体的であること」「実践を重んじること」が大切であることを伝えたいと思ったのである。

本来論ずべきは、授業内容や授業展開についての創意や工夫であろう。しかし、ここでは少し焦点はずれるが、授業の周辺で授業者と学生が展開した小さな実践の跡を報告しようと思う。学生の弱点補強に多少は役立ったと思われるからである。

2　シラバスから

周辺を語るにしても、まずは授業について触れておかなければならない。担当最初の春学期における「授業構成法演習（国語）Ⅱ」のシラバスは次の通りである。授業の内容は、学生の反応を参考にしながら修正を加えていったが、これが基本モデルになった。（2年目からは、主に〈Ⅰ〉で「中学国語」を、〈Ⅱ〉で「高校国語」を扱うようにした。）

「授業の目標」は「中学・高校の国語教師を目指す者が、国語科の授業の展開について演習を行い、実践的な授業技術を身に付ける」とし、具体的実践力の育成に力点を置いた。

「授業内容」は次の通りである。テキストは『精選国語総合』（明治書院）を参考にした。

① ガイダンス並びに学習指導要領（国語）について

② 論作文　「私は国語をこう教える」

③　教育実習に向けて　「若さは未熟。若さは魅力 - 実習心得 - 」
④「現代文」の授業（1）評論教材　「水の東西」（山崎正和）
⑤「現代文」の授業（2）小説教材　「羅生門」（芥川龍之介）
⑥「現代文」の授業（3）韻文教材　「短歌と俳句」（正岡子規他）
⑦「古文」の授業（1）入門期の古文「枕草子」
⑧「古文」の授業（2）古文の読解　「徒然草」「平家物語」
⑨「古文」の授業（3）韻文を含む古文「伊勢物語」
⑩「漢文」の授業（1）入門期の漢文「故事」
⑪「漢文」の授業（2）漢文の読解　「史伝」（十八史略など）
⑫　試験問題作成実習（1）　「水の東西」「羅生門」のいずれからか
⑬　試験問題作成実習（2）　「徒然草」「平家物語」「伊勢物語」
⑭　音声言語の教育について

このシラバスには最初から無理があり、時間配分を変更しなければならなかった。「模擬授業」に時間を多く要したのである。全員に体験させたいと思って授業を組んだのだが、一人当たりの時間を切り詰めても 90 分の授業内では 3 人が限度であった。しかし、この「模擬授業」によって授業展開の難しさを実感し、学生の意識は大きく変化したのだった。

現代文では、「水の東西」「羅生門」、古文は「徒然草」「平家物語」「伊勢物語」、漢文は「故事」をそれぞれ分割、分担させた。教師役の学生以外は生徒役を演じ、授業後には両者による質疑応答の時間をもった。

教師役の学生は、資料を調えて授業に臨んだが、「生徒の活動」を引き出すよりも、自らの説明、解説が多く、特に生徒への「発問」に、内容、仕方ともに工夫の余地があった。「発問」の力を鍛錬する上で、「試験問題作成実習」（シラバス⑫、⑬）は、有効であると言える。模擬授業の大きな収穫は、学生たちが教材研究、特に教材の読み込みの重要性に気付いてくれたことである。

初年度の時間配分の失敗から、翌年は年度の始まる前に、「授業構成法」担当者、松村美奈先生に打合わせ相談会を持ってもらうことにした。内容は、指導教材の重複や重点教材のチェック、指導方法の検討、参考図書の紹介などであるが、この打合わせによって指導内容を互いに知ることになり、指導漏れや、利用教材の重複が避けられ、双方の授業効率が上がることになる。以後、毎学期、学期の始まる前に打合わせ会を持つことにしたのだが、この情報交換は授業の反省と同時に次の方策を考えるよい機会となった。また、学生の様子も掌握でき、効果的な指導につながることになったのであった。

3　授業のはじめに

授業が始まる前の、まだ何となく落ち着かない間の時間、10分前後を「私の時間」として使わせてもらっていた。

授業に無理なく集中させるために、「ちょっ

とした話」（国語に関心を持たせるためのもの）プリントを配布し、5分程度の時間を与える。その後、簡単に解説を加えて本来の授業に入る。ウォーミングアップのできた脳は、集中して授業に入っていけるというわけである。以下にそこで扱った「ちょっとした話」の例を挙げておく。

(1) ちょっと漢字を

「難読漢字」や「四字熟語」など10～20問を印刷した紙片を配布する。学生は直ぐに解答に取りかかるが、解らないときには隣と相談してもよいことにしてある。確かに漢字を苦手とする学生は多いようだが、そのことを自覚しているせいか取り組む姿勢は真剣である。3～5分程度で解答をする。学生は自己採点をするが、点数は問わない（点数を問わないのがコツ）。わずか10～20程度の漢字を15回実施したところで、習得できる数は知れている。ねらいは、言葉や文字へ関心を向けさせることにある。

(2) 新聞記事から

教育や国語・言葉などに関する記事をコピーして読ませる（思った以上に学生は、新聞を読んでいない）。「読んでおきなさい」ですませることもあれば、簡単な解説を加えることもある。学生に意見を求め、その後にコメントを加えることもある。学生が身近にある教育や国語に関する話題に関心を向け、自分なりの判断を持つようになることを期待するのである。（授業の最初に、スクラップブックを作ることを勧めてある。）

(3) 教育に関わる話題

たとえば、大村はまさんの一言（短い話なので例示する）。

「これから教師になる若い方が、今の気持ちをきかれて、『自分には何もできないけれど、教育への愛がある、真心がある、これでやっていくんだ』とおっしゃっていました。そこいらへんが不安です。

熱心と愛情、それだけでやれることは、教育の世界にはないんです。子どもがかわいいとか、よく育ってほしいとか、そんなことは大人がみんな思っていることで、教師だけのことではありません。

そんなものを教師の最大の武器のようい思って教師になったとしたら、とてもやっていけないと思います。

教師としては、人を育てる能力、教師の教師たる技術を持っていなければ困ります。たとえば、お話ひとつとっても、魅力的に話せる、騒いでいた子どもが思わず耳を傾けるようなお話ができなくてはならないのです。」（『灯し続けることば』より）

こうした話は、学生の気持ちの中に素直に入っていく。幾人かが、授業評価の感想欄に「印象に残ったもの」として記していた。

4　授業が終わって―昼食を取りながら―

4年生の数名が「補習授業をお願いできませんか」と言ってきた。非常勤の私と学生たちの授業の空き時間を合わせるのは難しい。結局、担当時間が2限（11時～12時30分）で

あるので、３限の開始時間13時20分までの昼休み時間50分を利用することになり、初年度は松楓館の食堂の片隅で始めたのだった。昼食を取りながらの授業である。

学生の希望は「文語文法」や「漢文句法」の復習であった。毎回10名ほどの学生が集まる。基本的なところからの復習であったが、つまずいている箇所を自覚しているだけに、その修正補修に時間はかからなかった。また、学生の意欲の高さは、最後まで欠席者がなかったことにも見て取れる。その後毎年、４年生からの希望があり、５年間続くことになる。（翌年からは、空き教室の利用が可能になる。）

(1) 復習文語文法

学生は「助動詞」を苦手にした。つまずき箇所について個人の質問も受けるが、期間も時間も短いので、７回程度でマスターできるように、復習プリントを準備した。「整理」と10問程度の「問題演習」(文法に正しく口語訳）の組み合わせである。取り上げる用例とちょっとした解説で、高校時代の学習の記憶を取り戻し、「文法がわかれば、口語訳ができる」ことを納得するようになる。

(2) 復習漢文句法

大学入試で「漢文を除く」ことになれば、高校での「漢文」の扱いは軽くなる。漢文句法などにかける時間は少なくなり、基礎的な力の不足を招いて、漢文を苦手とする学生が多くなることになる。

漢文の基礎力を補うために、「漢文句法」を整理することにした。「復習文語文法」の続きで行うので回数は６回程度となる。まずは、「用字法」「基本句法」について、文法の復習と同様に「整理」と10問程度の「問題演習」を組み合わせたプリントを用意した。基本句法をマスターしておれば、応用が効くようになる。高校時代の既習事項を思い出させ、ポイント解説で不足部分を補った。漢文にとっての「重要な漢字」（助字や、同訓異字、多くの読みを持つ漢字など）は、自学させることにして、漢文についての基本はおさえることができたと思われる。

(3) 論作文添削

シラバスでは②に論作文を置いて「私は国語をこう教える」を課題として提出させた。この課題は添削して返却する（一部は、本人の了承のもとに例として取り上げ授業で解説もする）。一度この添削の過程を経ると、「論作文」や「志望理由書」の下書きを見せに来るようになる。指導後に書き直させたものは、最初の作品とは比較にならないほど整った文章になっている。「他人に読んでもらうことを意識して書きなさい」という指導より、実際に書かせて提出させることである。具体的にやらせてみることである。

５　終わりに

40年以上も前に学んだ豊橋校舎で、今度は自分が教壇に立って学生に教えることなど思いもよらなかった。65歳から定年までの５年間は、感慨深いものであった。40歳以上の年

齢差がありながら、先輩と後輩という親密さの中で授業ができたことを嬉しく思う。

講座を通して私がやってきたことは、ささやかな試みでしかなかった。自分が教師生活で得たものを若い後輩に引き継ごうという思いで教壇に立ったのである。しかし、そんな思いには関係なく、若い後輩たちの教師を目指す意欲は旺盛だった。その意欲に目を見張らされたのである。それは、受講の姿勢はもとより、「補習お願いします」や「授業、聴講させてくだい」の申し出であったり、ファックスでの指導案の添削依頼だったりという行動そのものに表れていた。そして、その意欲が本物であったことは教員採用試験の合格という結果で証明された。意欲ある後輩諸君のさらなる健闘を祈る。

最後に、愛知大学の教壇に立つ機会を与えていただいたことに深く感謝する。そして、多忙の中で打合せ会を持っていただき、授業の資料や貴重なヒントをくださった松村美奈先生には心からのお礼を申し上げたい。

（付記）【１】本文で引用したアンケートに答えて下さった履修学生の皆様及び添削例を残してくれた学生の皆様に深謝いたします。

【注】

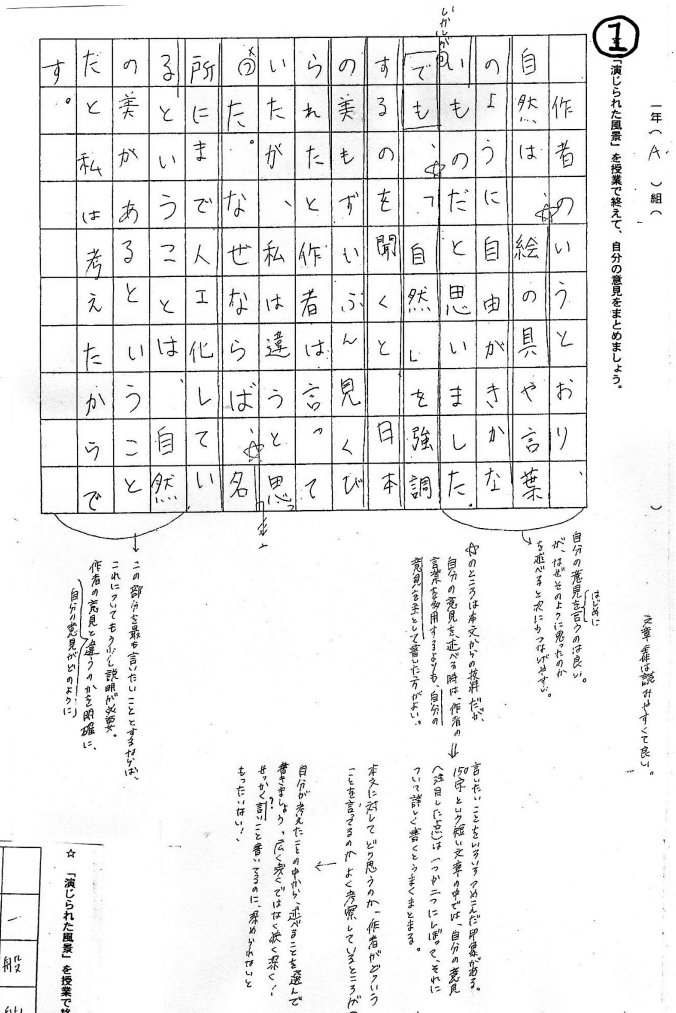
1　橋本武『〈銀の匙〉の国語授業』岩波ジュニア新書　平成24年３月22日

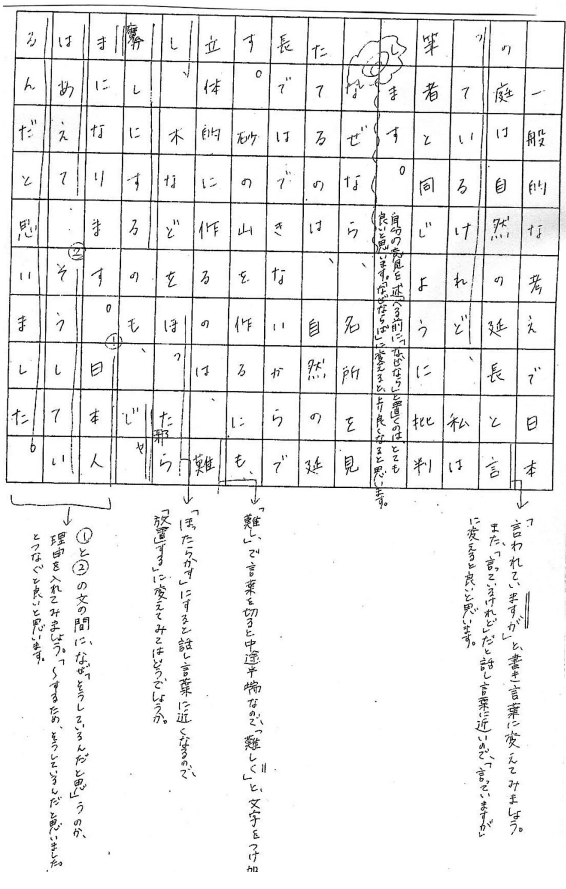
2　愛知県総合教育センター『授業の手引き（高等学校）』　平成18年３月

3　町田守弘編『明日の授業をどう創るか』三省堂　平成23年７月30日

4　齋藤孝『読み上手　書き上手』ちくまプリマー新書　平成20年２月10日

【添削実践資料の一例】





実際の答案を添削して、どういう点に気をつけたか。
また、添削してみての感想を書こう。

正直、此が高1の書いた文だと信じられなかった。
熟語の少なさや「原稿用紙の使い方」にいたるまで、低レベルすぎて驚いた。
作者の意見を否定した文章だったので読みがいがあったが、何が言いたいかほとんどわからなかった。
添削は、生徒の文がより上となるために（生徒の意見を変えずに）行った。
生徒の意見を尊重しつつ、文をすきりさせるのを考えるのが大変だった。
生徒の意見がもっと深め広まるようにアドバイスするのはむずかしかった。
生徒へのアドバイスの中にも少しでも生徒をほめるよう心がけた。

◇実際の答案を添削して、どういう点に気をつけたか。
また、添削してみての感想を書こう。

まず、添削の文を理解するのが大変でした。自分自身の言葉の使い方や論文の理解にも自信がないので、この指摘やアドバイスは正しいのか、という不安もありました。
添削してみて直ぐ目に、やはり話し言葉と書き言葉です。書き言葉の間に話し言葉が混じるなど、メールの影響もあってか、統一性のない文章になっている部分がいくつかありました。
添削していて気をつけた点は、どうしたら生徒を傷つけずアドバイスできるか、という点です。良いところをほめることは簡単でしたが、間違っている点を指摘することは、難しかったです。
添削する際には、問題文を理解するだけでなく、何十枚という答案、そしてそれを書いた生徒の気持ちを汲み取ることが必要だと思いました。

原稿用紙をいっぱい使っていて良いです。

③

☆「演じられた風景」を授業で終えて、自分の意見をまとめましょう。

て	日	じ	人	②	人	思	と	と	し	め	の	い	西		
い	本	も	の	て	の	い	じ	は	て	風	場	る	洋	私	
と	の	を	方	い	方	ま	う	真	い	景	合	と	の	は	
い	風	の	が	る	が	す	こ	逆	る	を	は	思	方	西	
い	景	ま	お	ま	人	。	と	で	が	を	自	い	が	洋	
と	を	ま	寺	す	エ	作	を	：	西	の	分	ま	人	と	
思	よ	姫	や	け	的	者	い	見	洋	ま	が	す	エ	日	
い	く	し	城	れ	だ	は	な	た	は	を	見	。	化	本	
ま	表	た	城	ど	し	日	い	て	日	表	た	日	し	そ	
す。	し	り	な	、	言	本	と	る	本	現	対	本	て	は、	

◆書き終わったら、授業担当者に提出→→→戻ってきたらノートに貼っておくこと

名前

名所に大自然を見たてているのが日本の庶人的な部分です。文頭にある自分の立場を最後まで貫いているのは良いです。後は、自分の意見を読んでもらう相手に納得してもらえるよう、なぜそう思ったのかを書きましょう。なぜ、日本人が自然を見たてるのが良いと思ったのか、詳しく書けると良いです。

「けれど」は話し言葉です。

教科書で読み取れるので、「思います」で終わらなくて良いです。西洋と日本の違いをよく読み取れています。

（P93 最後の段落から）

最初に自分の立場をはっきりさせていて◎です。

◇実際の答案を添削して、どういう点に気をつけたか。
また、添削してみての感想を書こう。

原稿用紙の使い方や話し言葉の混入などはすぐになおせることができたが、内容の添削にはやはり時間がかかった。堀内さんが述べていたように、自分がどれだけ教材を理解できているかにかかってくると思う。筆者が何を伝えたかったのかを教師である自分が理解していないと、生徒の立場も分からない。添削しているうちに、自分が生徒の立場になって考えてみた。「150字で自分の意見を述べること」を考えると、自分も苦労すると感じた。私が担当した生徒の意見文は、最初に自分の立場（筆者とは逆の考え）を明らかにしているが その意見を納得させるための「肉づけ」ができていない。文の終わりも、「いいと思います。」という曖昧の終わり方になっており、「あぁ、150字じゃ該なかったのだなぁ」と感じた。150字でおさめるために、要点だけを書く方法を指導したい。

文字だけで生徒に理解してもらうのは大変だと痛感した。やっているうちに、生徒と一対一で教えてあげたい！と思ってしまったので、自分も精進しないといけないなと思った。

④

☆「演じられた風景」を授業で終えて、自分の意見をまとめましょう。

一年（ A ）組（

表	を	に	と	か	か	ジ	と	ぜ	い	う	美	ま	こ	に	
現	思	せ	思	，	な	ナ	い	名	ま	心	し	す	と	見	私
す	う	よ	い	た	い	ル	う	所	し	が	く	。	に	た	は
る	気	自	ま	の	庭	の	こ	に	た	素	表	一	二	て	日
で	持	然	レ	で	を	世	と	見	。	晴	現	つ	つ	て	本
し	ち	を	で	は	作	界	で	た	二	ら	す	目	意	つ	の
ょ	を	通	た	な	っ	に	す	て	つ	し	る	は	見	く	庭
う	人	し	。	い	て	一	。	た	目	い	庭	名	が	ら	が
。	々	て	ど	か	も	つ	オ	の	は	と	を	所	あ	れ	名
	は	庭	ち	，	良	し	リ	か	な	思	思	に	り	る	所

「表現するでしょう」という
言い方だと 意見が曖昧です。
「…でしょう」という表現ではなく、
「…だと思います。」など、
と断定した形で書くと 伝わりやすくなります。
文章の末尾にまとめを持ってくる 構造は良い。

自分の意見が分かりやすく
良い書き方だと思います。

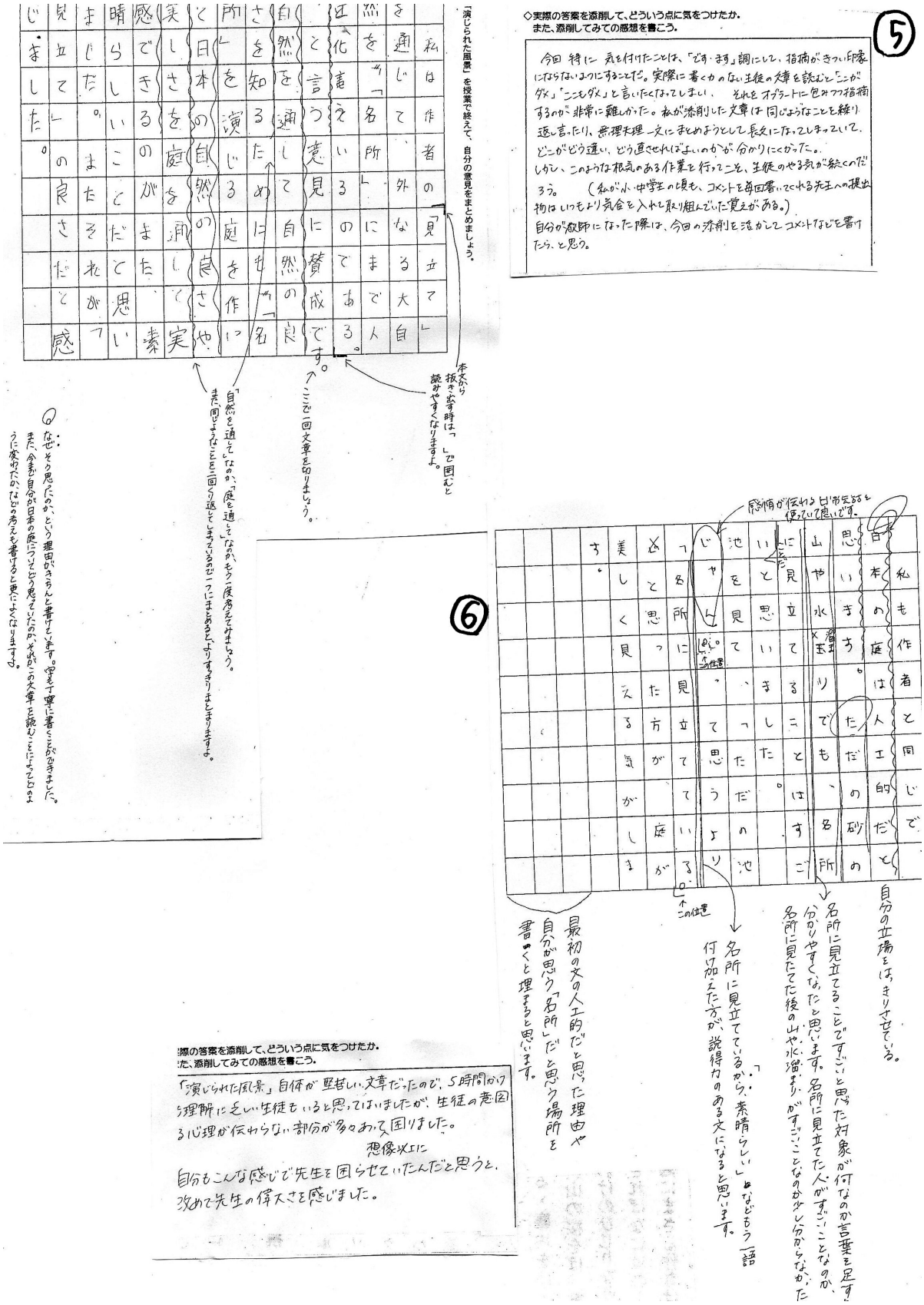
文章がやや崩れていますね。
「名所に美しく～」では 伝わりづらいので、
「名所のように」などの表現が使えると 良いですね。

最初に意見をまとめると
文章が読みやすくなって良いです。

◇実際の答案を添削して、どういう点に気をつけたか。
また、添削してみての感想を書こう。

分かりやすく欠点を指摘し、次からそれを生かしてもらえるような添削を心がけたが、難しかった。

意見文なのに感想だったり、文が崩れていたりしてどうやって指摘したらいいか悩んだ。言いたいことは伝わるのだが、どうやって直したらいいか、どうやったら相手に間違いの直し方を伝えられるのかということを考えながら書いていて 本当にこれで伝わるのかどうか とても不安になった。



「演じられた風景」を授業で終えて、自分の意見をまとめましょう。

私は作者の「見立て」自然を通じて化を言葉で名所、外にないまる大人工的だと思った。

日本の庭は人工的だと思った。

私も作者と同じで、自然を通じて日本の庭は人工的だと思った。

自分の立場をはっきりさせている。

感情が伝わる比喩表現を使っていい感じです。

◇実際の答案を添削して、どういう点に気をつけたか。
また、添削してみての感想を書こう。

⑤

今回特に気を付けたことは、「です・ます」調にして、指摘がきつい印象にならないようにすることだ。実際に書くかのない生徒の文章を読むと「ここがダメ」「ここもダメ」と言いたくなってしまい、それをオブラートに包みつつ指摘するのが非常に難しかった。私が添削した文章は同じようなことを繰り返したり、無理矢理一文にまとめようとして長文になってしまっていて、どこがどう違い、どう直せばよいのかが分かりにくかった。
しかし、このような根気のある作業を行ってこそ、生徒のやる気が続くのだろう。（私が小・中学生の頃も、コメントを毎回書いてくれる先生への提出物はいつもより気合を入れて取り組んでいた覚えがある。）
自分が教師になった際は、今回の添削を活かしてコメントなどを書けたら、と思う。

「見立て」自然を通じて化を言葉で名所、外にないまる大人工的だと思った。

日本の庭は人工的だと思った。

私も作者と同じで、自然を通じて日本の庭は人工的だと思った。

自分の立場をはっきりさせている。

感情が伝わる比喩表現を使っていい感じです。

本文から抜き出す時は「　」で囲むと読みやすくなりますよ。

ここで一回文章を切りましょう。

自然を「通じて」なのか、「庭を通じて」なのか、もう一度考えてみましょう。
また同じような言葉を二回くり返してしまっているので一つにまとめるとよりすっきりしますよ。

⑥

なぜそう思ったのか、という理由がきちんと書けています。字も丁寧に書くことができました。
また、今まで自分が日本の庭についてどう思っていたのか、それがこの文章を読むことによってどのように変わったか、などの考えも書けると更によくなります。

| | | |